

# 神山町の葬送儀礼

民俗班（徳島民俗学会） 庄 武 憲 子<sup>1)</sup>

## 1. はじめに

葬送儀礼は、避けることのできない人の死を受けとめ、弔うものである。そのために、人々の死に対する悲しみや畏怖などの感情や信仰から成り立っている。近年は、火葬場の整備、葬儀社などの介入で、葬送儀礼は、人々の手から離れて専門業者に任される傾向にあり、古くからの葬送儀礼は変化している。こうした中で神山町は、焼山寺をはじめ、寺院が多く、真言宗への信仰が人々の生活に密着した地域であり、葬送儀礼についても古くからのしきたりを残す所が多い。

調査では、平成11年7月27日から30日の4日間に、神山町鬼籠野、神領、上分地区在住の、大正生まれの男性4名に、土葬が行われていた昭和初期ごろの葬送儀礼のしきたりについて聞き取りを行った。その結果を以下記しておきたい。

## 2. 葬送儀礼の流れ

### 1) 死の予兆

人が亡くなる予兆についてのいいならわしがある。カラスが異常に鳴く、亡くなる人が夢枕に立つ、下駄の鼻緒が切れる、などが予兆とされる。このほか神山町内で、尾を長く引く犬の遠ぼえも死の予兆という事例が報告されている（徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会、1993）。

### 2) 臨終

#### (1) 魂呼び

臨終間際に、消えようとする魂を呼び戻そうとする慣行を「魂呼び」という。今回の調査では聞き取れなかったが、神山町内では、魂を呼び戻すために青竹の筒に米を入れて振ったり、箕を振りかざしたり、屋根の上に登って「〇〇さん、もどらっしゃれ」と大声で叫んだりする例があった（徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会、1993）。

#### (2) 末期の水

息を引きとるとすぐに死者の口に水を含ませる慣行を「末期の水」という。臨終に立ち会った死者の親族が、花柴、檜の葉に水をつけて死者の唇をぬらした。

#### (3) 通報

---

1) 徳島県立博物館

死者が出るとすぐに、死者の出た家の近隣、講中の男性が二人組みとなり、手分けして親類、知人に知らせに走った。これを「飛脚」という。かつてはどの家庭でも、いつ飛脚が来てももてなしができるように「飛脚飯」といって、米2升・素麵<sup>そうめん</sup>5把を常備しておくのがしきたりであった。

(4) 神棚の不浄よけ

死者が出たらすぐに、その家の神棚に白紙を張って閉じる。

(5) 枕直し

末期の水を終えると、死者を北枕に寝かせる。その際、枕元に「枕飯」を供え、線香1本に火をつける。

(6) 魔よけ

遺体の側に魔よけとして鏡を置いた。男なら刃物、女なら鏡を置くとしているところもある(徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会、1993)。

(7) 湯かん

親類のものが知らせを受け、一堂に集まったら、死者の体を清める湯かんを行った。湯かんは家の奥の間で行う。奥の間の畳をあげ、その上に竹のすだれを敷いて行う。竹のすだれの上に遺体を寝かせ、柄杓<sup>ひしゃく</sup>を逆手左手に持って、水をかけて流して清めた。

(8) 衣装替え

湯かんが終わったら死者を死装束に着替えさせる。死者が死装束にかわると、「病人から死人にかわる」という。

死装束は、白色の帷子<sup>かたびら</sup>。糸の終わりを留めないで縫ったものとする。この帷子を死者に左前に着せる。また白色の手甲、脚半をつけて、足袋を履かせ、手に数珠を持たせる。

(9) 納棺

死装束をつけたら、棺に納める。多くは、「サンヤブクロ」という袋に、握り飯と、「三途<sup>さんず</sup>の川の渡し賃」のための六文銭を1枚か2枚入れた。鬼籠野では副葬品は「サンヤブクロに7品入れる」とし、米と、粟<sup>あわ</sup>、稗<sup>ひえ</sup>、などの雑穀を、合わせて7品入れた。

3) 通夜

身内の者が死者の枕元で夜を明かす。古くは、死者と血縁の濃いものが、死者の隣に布団を敷いて傍らで寝て過ごした。

4) 葬式

葬式の始まる前に「六地藏」(図1)を庭に設ける。また、青竹を3本組んでつくる棚に蓑笠<sup>みのかさ</sup>をつけた「カリヤ」(図2)というものを設置する。

葬式は夜に行うものであった。表座敷に祭壇を作り、僧が経を読み、列席者が焼香を行う。焼香が終わると野辺送りとなる。

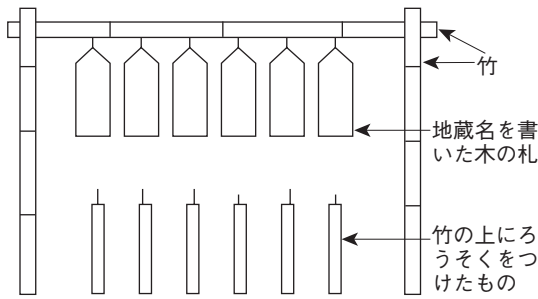


図1 六地藏

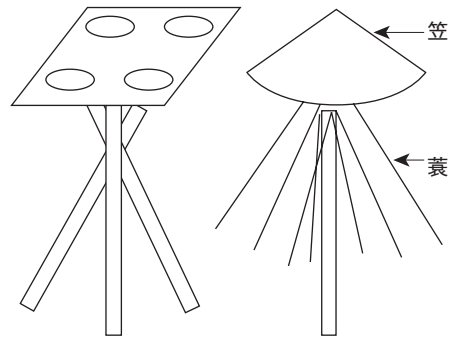


図2 カリヤ

### 5) 野辺送り

#### (1) 庭の賛

葬式が終わると、庭で葬列を組む。その順番は、灯ろう2名、四本幡<sup>しほんばた</sup>(諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽)4名、小判1名、四花1名、しゃ水1名、遺影<sup>いはい</sup>1名、位牌1名、棺担ぎ4名、天蓋<sup>てんがい</sup>1名、膳<sup>ぜん</sup>の綱を持つ女性複数名である。この順で家の庭を時計回りに3遍回り、門を出て墓地に向かう。庭で葬列が回ることを「庭の賛」という。

#### (2) 出棺

庭の賛が済んで出棺の際に、家の門で藁火<sup>わらび</sup>をともし、死者の使用していた茶わんを割る。また、庭に設置したカリヤに飯を供える。カリヤに供える飯は、洗わずに炊いた2合の飯を四つに分けて盛る。

墓地につくと、穴掘り役が掘った墓穴<sup>かめ</sup>に甕棺<sup>かめ</sup>を埋葬し、その上に「ケドウ石」と「拝み石」(図3)を積んで、「野位牌」を置いて祀った。野辺送りに使用した道具は、埋葬後墓地で焼き払った。

墓地から家へ戻ってくると、入口で手を洗う。この時、手ぬぐいで「拭くのではなく、たたくようにしなければいけない」という。また清めの塩をふる。鬼籠野では野辺送りから家に戻ってきた人は、竹の台(図4)をまたぐ風習があった。

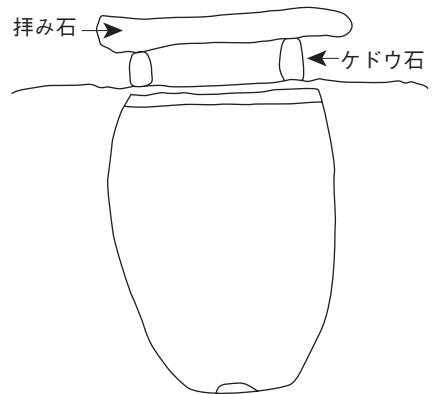


図3 ケドウ石と拝み石



図4 竹の台

### 3. 講中の役割

葬式を行うにあたっては、神山町では「講中」と呼ばれる組織が協力して、扶助する仕組みになっている。講中は、一般的には、同一在所内の家々がその人員となるが、行政上

の地域区分とは異なり、相互扶助、見舞い、訪問などの、古くから培ってきた社会関係をもった家同士の集団である。死者の知らせを受けると講中では、1戸につき男性1名、女性1名の手間を出して手伝う。また、話し合いで役割分担を決め、葬儀が滞りなく行われるよう手配する。以下講中の葬儀での役割分担について記しておく。

- ① 飛脚 死亡通知をその家の親類全部に知らせに走る。
- ② 張りもの 灯ろう二つ、幡<sup>はた</sup>4本、四花、小判、天蓋、竹の杖、葬列に参加する人数分の草履、三角形のはちまき、膳の綱などの葬式用具の準備。
- ③ 石取り 埋葬した棺の上に置く拝み石を取りに行く役目。
- ④ 穴掘り 棺を埋葬するための穴掘りをする役目。
- ⑤ 寺雇い 役場への届け、必要なものの買い出し、寺との交渉などをする役目
- ⑥ 内手伝い 葬儀の間、その家の台所の賄いをおこなう役目。講中の女性が行う。

#### 4. 葬送儀礼の変化

現在、神山町で行われる葬儀は変化してきている。最後にその変化について記しておく。大きな変化は、土葬から火葬が一般的になったことである。火葬場は、上分では大正時代、阿野では昭和2年（1927）に、神領では昭和7年に作られている（徳島県文化振興財団民俗文化財集編集委員会、1998）。火葬が一般的になったのは昭和30年、町村合併後とされ、火葬場への棺の運搬にも霊柩車<sup>れいきゅうしゃ</sup>として自動車を使用されるようになった。火葬への変化にとともない、棺は甕棺から寝棺に変化した。講中で行っていた石取りや穴掘りの役割もなくなった。また野辺送りは、霊柩車による火葬場への運送となった。鮎喰川<sup>あぐいがわ</sup>上流域は、霊柩車に棺を乗せるまで、葬列を組んで庭の贅を行う所が多いが、下流域では行わなくなったところもある。

また、葬式の際に使用する祭壇は、未亡人会が所有する祭壇の貸し付けを行い、多くがこの祭壇を使用するようになっている。また祭壇に遺影写真を置いたり、花輪や弔電を葬式の際に使用するようになったのも昭和30年ごろのこととされている（徳島県文化振興財団民俗文化財集編集委員会、1998）。

#### 5. さいごに

お忙しい中、調査に御協力いただきました神山町の皆様にお礼申し上げます。

#### 参考文献

1. 徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会編『神山の民俗 比較文化調査報告 第5号』徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会 1993年
2. 徳島県文化振興財団民俗文化財編集委員会編『民俗文化財集 第16集 神山の民俗』徳島県文化振興財団 1998年